

北十字星



石原
翔

「結婚式の祝杯に『月と鶴』は可笑しい。元来月は満ち欠けをするから、あまり縁起の良いものじゃない。これはきつと他に何か意味するものがあるに違いない。それにこれはどう鼻^{ひいきめ}真目に見ても、鶴じゃなく白鳥よ。少なくともお祝いの席では、月は失格よ。そしてあえて月と鶴にしたのは、何か深い意味があるに違いないわ」卓抜した古い師の先堂道子は、真紅の盃をユラユラ揺らしながらそう言いきった。

また長崎県のキリシタンで、豊臣秀吉の弾圧をかくぐり、表向き仏教の信者を装い、隠れてキリスト信仰を続けた、その子孫であるという、元カクレキリシタンの園田信夫は、その中に『羽を広げた白鳥』が十文字に見えるのを見て取った。そしてそこに月が輝いて見えることから、この盃の意味するものは天井にある、と言った。

「すると白鳥座のことか」長野慎一は問うた。

「そうだ」

「それがどうかしたのか」長野慎一は腕組みをした。

「大した意味はなからう」園田信夫は、言葉と裏腹に、含蓄深い顔をした。

「いや、それが隠れキリシタンの遺物（金蒔絵天目茶碗・めだる・ロザリオ・書簡断簡・聖遺物入れ・布製メダル……）の中から見つかったと言うのは、何かにおうものがある。それに白鳥座は北十字星でもあるんだよ」園田は十字を切った。

自宅に帰った慎一は直ぐにパソコンの前に行き、インターネットで『白鳥座』を検索した。そこには「夏の夜空に美しく輝く、天の川銀河の中に、壮大な姿を浮かべている」いわゆる南半球でしか観ることのできない南十字星を振って、北十字星とも呼ばれることもある星座であると記されている。白鳥は南の方角に向かうものらしく、嘴^{くちばし}は見かけ状、いくぶん下を向いて羽を広げている。広げた翼の北方向にデネブ、南に金色と青色の美しいアルピレオそして東は色様々な連星で、西側はギエナーの各星々の集合体である。その中点にサドルと言う星を載っている。

慎一はインターネットを閉じた。そしてベランダに出ると、真正面の大病院に挟まれ、長方形に切り取られた細い夜が、街路灯に滲んでいるだけ。何かに導かれるように、マンションの屋上まで昇りその姿を確認した。そして早々に細君に床を延べてもらい、タオルケットの上に横になりながら、「今日はすごい収穫だった」と細君に話しかけると

「そう。ダイヤモンドでも拾ったの」と滅多に冗談をいう女ではないが、そんなことを言いながら笑った。

うとうとしながら「突拍子もないことばかり言って、それを聞いている者の身にもなってみてよ」と口には出さぬが、そう思っていることであろう。「俺も奇を銜ってばかりで、今後は注意するよ」と思ってみても、この世の中、奇を銜っていても生きて行ける。それほど現在という怪物はのさばっている。ただ働かねば食っていけないから、最も楽そうな仕事を選んで、経済的に細君との折半で共同生活している。

とても元気で才気あふれる人間ならいいが、この慎一は少し精神を病んでいるから、なかなか巢から飛び立つことが出来ない。それでも爪に火を灯しながらも、食っていけるのは、幼いころ母親から「学校にいきなさい」と口酸っぱく言われたのち、『学問のすすめ』を書いたのは誰だと罵りながらも、洪々でも登校できる平和な社会になったからこそである。この母親の義務感の強さが、転落しながらも、人様に後ろ指刺されることなく、暮らしていける現実を作りだしてくれた。

例え、半農半漁で暮らしは決して豊かではないが、この家のこの両親の学問にかける熱意はとても熱く、次々と生まれてくる子供達を養うために、父親はひとり故郷を離れて、船員になった。そして自分の身も顧みず、慎一の弟妹達の向学心を満たすべく、人並み以上の努力を続けたのだった。父親の記憶があまり大きくないことは、彼の多忙さゆえである。慎一の目には父の背中ばかりが映った。

昭和三〇年頃の、学校の権力は強大で、教師の言うことは絶対であった。そしてそんな学校と各家庭との繋がりも極めて強かった。

そんな学校と家庭の環境の中で育った慎一は、社会に出て、働くことは当然のこととして認識した。そんなことを考えている内、慎一はいつの間にか眠ってしまったらしい。

ゆらゆら揺れる『月と鶴』の盃を落としてしまう不始末の中で目覚めた。「縁起でもない」と隣に目をやると、しどけない細君の寝姿。しようがないな、と再び眠りに就く慎一。

夏の朝は五時前から明るくなる。枕元の電波時計を見ると、五時半であった。これ以上の睡眠は惰眠になると、起き上ると、背中がぐっしょりと汗に濡れている。その内、細君も目をさまし、二人同時に寢床から離れ、細君が布団を上げている間

に、一か月前に飼った鈴虫一〇匹（この日、数を数えてみると、六匹しか確認できない）に、胡瓜と茄子の切れ端を交換し、スポイトで土を湿らせ、山茶花の小枝葉を水に浸し箱に入れ、ベランダのカポックの葉影にそれを置いた。鈴虫は揺れる木漏れ日の葉影でこれからゆっくり食餌をして、眠るのだろうか、動きも次第に緩慢になった。飼った当初は元気で跳ねまわっていたが、日が経つにつれ、ずいぶん勢いが弱くなった。それでも可愛いもので、その細いアンテナのような触覚に割箸で触れると、サツと逃げの態勢をとる。何はともあれ逃げることこそ、生命維持の基本であるとしても、教唆されているのだろうか。

鈴虫はその大事な触覚を丁寧な舐め、感覚を研ぎ澄ませて今日も生きる。

そして胡瓜や茄子の上に乗る、カツオの粉で蛋白質を補い、早すぎる秋に驚いたように、慎一の間を見つめた。「これらは秋の虫なのに、六月に生命を与えられ、秋一番になる前に死に絶えるのか」

この世に現われたのは何故であろう。自分の生命を蘇生させるため、生殖行動を起こすだけの人生なんて、あまりにも単純すぎやしないか。でも実際はそれが正解。やがて人間も鈴虫のように、この世に恨みつらみの一つも残しながら、もっと言えば生老病（死）はあるけれど、それも生きておればこそ咲く人生の証し。花は実をつけてやがて枯れて、最期にはバクテリアの働きで土に還る。それを永遠に繰り返す。

顔を洗い入れ歯をかちかちと鳴らしながら、点眼するために両目を洗う。そして勤行を一頻りあげ、食事は菓子パンと調理パン。それをアイスコヒーで流し込み、薬を服用して新聞に目を通す。

ニュースは学童のいじめによる自殺。まるで夢を見ているように、朧な生命の火が消える、という事実。今日は苛めた母親の反論が出ていたが、可笑しなことは「相手の子供が自殺した原因は自分の子供によるとする嫌疑」それによって自分の子供が自殺したらどうするんですか」と言う、はぐらかしの意見には、「何?」と首を傾げない訳にはいかない。そしてあたり大事な生命を、惜しげもなく散らしていく、勿体なさ。自分のことで申し訳ないが、僕の自殺未遂は決行されれば、それは犬死でしかなかったろう。と今だから言える。

新聞はオスプレイの飛行訓練に揺れている。沖縄に配備すれば、自然に沖縄が基

地になる可能性大なのに、そのことは問題外になっている。——もう他には読むべきネタはない。

これからの長い時間を持て余し、退屈さに辟易しながらも、細君に先のヒッグス粒子の私見を話そうとすると、もろに厭な顔をされ、「何を言っても、何にもならない」と結び、恰好だけの書斎に入り、いつ終わるとも知れない、書きかけの日記形式の随筆に加筆する。

この有り余る膨大な時間を、新風など吹き込みもせず、だらだら過ごすうちに、一日は空しく過ぎていく。

こうした生活を繰り返していると、喜怒哀楽もなくなり、安楽の反動に起因する、落ち込みと疑心暗鬼が育ち、今日の天気のように、いつ崩れるとも知らぬ黒雲に覆われ、いきなり夕立ということにならないとも限らない。夕立の後、爽やかな風が吹き、一時の清々しい日和になればいいが、それはやけに猥雑で、べたついた最悪の気持ち湧いてきて、面白くも可笑しくもなくなる。その時は寝ることにしている。

目覚めれば、燃えるような夏日に、映画『慕情』などの曲が聞えてくれば、その旋律に気分も生き返ったように華やぎ、やがて敬虔な祈りのように、静かで、気の向くままベランダに出てみると、火の鳥を焼くように激しい残照が目痛い。

慎一はよく風の通るベランダに腰を落とし、北十字星のことに思いを馳せつつ、新星、超新星、赤色矮星、中性子星そしてブラックホールなど、浮かんでくる記憶の限りを想像し、これらの天体が、刻一刻と大変化を起こしているのに、我われの身には何の変化も感じられないのが不思議にさえ思えてくるが、よくよく見ると地球号は難破もせず、まいにち星々の海原を航海し、生まれては死に、死んでは生まれ変わりを、際限もなく繰り返している。そしてそこに暮らす人間も、一つとして例外である訳などない。

慎一は手に持っている真紅の盃を凝視した。その中を日本酒でみだし、ユラユラとゆすってみた。その一部は盃の外にこぼれた。だが大部分は盃の縁に当たり、外へ出るのを拒まれ、暫くすると表面は静かになった。

それにしても盃の日本酒の原子は引き合っているのだろうか、それともお互いに反発し合っているのだろうか。という疑問が湧いてきた。だがそのような疑問は直ぐに解けた。お互いに引き合っているから、盃の中に留まることが出来た。では、

それは盃の中心に向かって、集まっているのだろうか。

ところで、北十字星は、サドルという中心星を起点に十文字型に広がっている。それらは引力で引き合っているに相違ない。では、白鳥座（北十字星）のアルビレオと地球の間には、引力は働いているのだろうか。それともこうした質問自体が誤っているのだろうか。いや力の大小はあるかも知れないが、微弱ながら引力で引き合っているに相違ない。すると全ての星が大なり小なり繋がっている？　そして星々の配列が干渉し合うことから、ここに星占いの原点がある。

今日はひどい荒れ模様の天気。雨に風が加わり、ベランダにも雨がかった。カポックの緑や楓の緑緑した葉は新鮮で、今しがた美しく新たに蘇ったかのよう。洗面器に雨が貯まって、幾つもの波紋が千切れ途切れになり、単調な音を立てているのを、長い間注視していた。

この時、慎一はふと洗面器の波紋の千切れを比較していた。雨の一滴一滴が狭い洗面器の中で、干渉し合って出来ては消えている波紋。一滴一滴はしっかりと型崩れのない波紋が出来ているのに、こうして集まると何か得体の知れないものとなることを、そして宇宙にも立派な秩序があるのに、その全体像が掴めないのは、こうした洗面器のような干渉の現象があるからではないのか。それは星々が巨大な真空の中を泳いでいる姿をイメージさせる。

慎一は厚い雲の裂け目から、一筋の夏の光が差しているのを、飽きることなく眺めていた。慎一は雨後の綺麗に洗われた緑葉の輝きに、新鮮で初々しい少年の日の自分を重ねた。

天体を観る時、ため息とともに一番出たがる言葉は「すごいなー」である。それは星の大きさそして星々間の距離のおおさと、莫大な数。「すごいなー」という言葉しか出てこない。これまで茫漠とした夜空を仰ぐなんてことはなかった。だが漠とした夜空は美しく癒しにもなる。

彼女とゆっくり夜空を仰ぐなんてことはなかった。ロマンもなにも何時も花より団子であった。それは星座が殆んど変わらないから、わざわざ特別なこともないのに改めて、星座を観察するなんて、考えは毛頭なかった。

星座と言えば、一昨年の皆既日食にも、今年の金環日蝕にも恵まれなかった。こ

れから先もう生きている間には、有効な天体ショーにお目にかかることはないだろう、ということだ。

これだけの星の数である、何処かで何らかの大変化が起きている、と思った方が正解である。あまりにも大きいため、または遠いため何も感じない。そんな中で、いま太陽活動が活発で、電波障害が起きるであろうと、騒がれた一時は過ぎ、目立った異常現象は起きていないようだ。だが日本や中国で、起きた記録的な大雨と洪水のニュースが入ってくれば、神経質に地球温暖化の所為だと、直ぐに結びつけるのは酷だろうか。被災された方々には気の毒だが、これも太陽の活動異常に起因するものか、どう判断しようもないが、気がかりなことではある。

それからこれも天体に関するものであるが、時は二〇一〇年六月、六〇億という気の遠くなるような距離を飛びぬき、その身はぼろぼろになりながらも、小惑星イトカワへのミッションを果たした快挙があった事を、忘れるわけにはいかない。彼の名前は『ハヤブサ』。彼は小惑星イトカワまで飛んだだけではなく、何とこの世の成り立ちを占う、鉱物まで採取し無事、舞い戻ってきたのだった。このニュースに世界は泣いた。

あまりにも広大な宇宙そして遠い星々。「すごいなー」と言いたいのが、あまりにも身近すぎて「すごいなー」と言いたくなる今回の快挙。

それは物質を結び付けているものは何か、という壮大な実験が行われ、例のヒッグス粒子が確認された。真空の中にこの粒子が存在することにより、物質同士の結びつきが説明可能になった。物質でもなく力でもない、この奇妙な粒子だけに、あまり関心は持たれていないようだが、大変なことになった。これは質量をもったものらしいから、万有引力も働く訳で、記憶の彼方から「おーい。俺を思い出してくれー」みたいな声が遠くからしたような気がする。

陽子同士を限りなく光速に近い状態でぶつけたところ、何か得体の知れない粒子——物質でも力でもなく、秩序をつくる粒子らしい——が確認されたが、それには姿がない。このヒッグス粒子は原子を構成しているが、原子が占める割合は宇宙の五割にしか過ぎなく、ヒッグス粒子なる実験肢が増え、星、銀河、惑星そして人間を作るには、暗黒物質が必要となるとし、そのヒッグス粒子を窓に、未知の物質である暗黒物質を追跡して行く内に、或いは向こうの世界が見えてくるかも知れない。それがこれからの研究テーマになってくる、と言う。

「どうやら我々は謎を解いて、さらに深い謎の世界に迷い込んだようだ。やはり「すごいなー」と言わざるを得ない。」

「たった三〇分で、五〇年間も待たれた結果を、言い尽くすことはできないが、それまでの深い研究が、膨大な実験設備と労力そして莫大な開発費なくしては語れない。そしてその顔かたちに姿も見せず、何処からやってきたもの——これは或いは想像を絶する異次元の世界かも知れない——何時できたのかも、最早これ自体が謎ではないか。」

「それは世界にとって有効なものなのか、ただ学問上あったかなかったかの話に過ぎないものか、それも謎。謎が謎を呼ぶ、これこそ科学的に説明されたメインテーマである再生、そのものではないか。」

あの馬の頭をきりりと掲げた暗黒星雲の謎が明らかになるかどうか。注目したい。

「今に天罰が下る」占い師の先堂道子は、自分には予知能力が備わっていると、信じて疑わない眉間の黒痣くろいぼを弄びながら呟いた。

「あなたはiPS細胞つまり人工多能性幹細胞の発見の時もそう言ったが、未だに何も起きない。それどころか研究はどんどん進んでいる」

「やはり神様の涙だよ」

「神様は何で泣きなさる」

「神聖な領域を汚すからだよ」

「神様が恵んで下ったものじゃないか」

「『平和に寄与すべし』と言って、核をくださったのに、戦争に使ったじゃない」

「神様は後悔なさっている」

「神様は人を自分に似せてお造りになった。そのため人間は使用方法など、熟知しているものと思ひ込んでおられた。あの時、出現した粒子は宇宙のバランスを壊すもと」

「だから、どうしろと」

「元に戻さねばならない」

「何処に行ったか分からないのに、どうやって」

「ブラックホールに戻せばいい。それには貢物が要る」

「貢物、それは何だ」

「草薙劍だよ」

「草薙劍？」

「平知盛と共に沈んだ宝剣だが、占うにどうやらこの地上にあるらしい」

「なに、何処だ、何処にあると言うんだ」カクレキリシタンは、それが性分なのかそれとも一時的爆発に過ぎないものか、随分興奮していた。

「まあ、そうせつつかない」占い師はやおら直径三〇センチもありそうな水晶玉を取りだした。そしてそれを三度手で擦った。するとそこに星座みたいなものが、浮かんで来た。そして

「これはどうやら北十字星の胸のようだ。つまり十文字の中央付近が怪しい」いつの間にかやって来たのか、カクレキリシタンの園田信夫が言った。

「儂はピンと来た。これは間違はなく十文字だ。キリスト様（様付けとは何といかがわしい）だ」

ここでお馴染みであろうか、四神という言葉——これは大陸の昔から言う守り神である、東に蒼龍、南に朱雀それに西に白虎とじるに北は玄武に神を配置すれば、千代安泰である——

「白鳥座と四神がどう関係するのだ」

「中心を走る線を結べば、どちらも十文字になる。十文字と言うのはキリスト様のみ」

「それでは何故にそれが交差点にあるのか」

「交差点が丁度中心にあるからだ」そういう議論をした後、

占い師は四方を鏡に囲まれた、小部屋に二人を連れていくと、机の上に水晶玉を置き、電気を消した。占い師は漆黒な闇の中、水晶玉を三度撫でると、何やら念仏を唱え出した。五分一〇分と時間は過ぎていく。すると四方に無限に続く水晶玉は、金色に輝く細長舟の櫂状かいじょうのものを浮かび上がらせた。

「おお」三人は息を飲んだ。それはこの世のものではないような、神秘の空間を作りだした。そしてお告げは「四神相応の中心点にある」と出た。これは紛れもない十文字東宝刀（草薙劍）と呼ばれるもので、そこに疑問を挟む余地はなかった。

「四神相応とは？」

「京都の四方の守り神だ」と言い、彼女はくしゃくしゃの紙をくれた。それには大方次のようなことが認められていた。

——東に素戔鳴尊（スサノオノミコト）・櫛稲田姫命（クシイナダヒメノミコト）・八柱御子神（ヤハシラノミコガミ）をご祭神と仰ぐ、それは八坂神社で守神は「蒼龍」（そつりゅう）。南に国常立尊（クニノトコタチノミコト）・八千矛神（ヤチホコノカミ）・神功皇后（ジングウコウゴウ）を祭り「朱雀」（すざく）を号する城南宮。西に大咋神とその氏神（賀茂氏）を祭り「白虎」（びやくこ）と号する、松尾大社。これは酒の神でもある。

そして北におわすは檜皮葺（ひわだぶき）で最古の木造建築であり、賀茂別雷（かもわけいかずちのおおかみ）大神を祭り、「玄武」（げんぶ）と称する。この四つの神に都は守られている——そしてそれらを結ぶと中点にあるのが、新撰組で名を馳せた壬生寺である。

そんな折も折り、不思議なことが起きた。というのは監視カメラまでつけ、厳重に監視されていて、それこそ鼠いっぴき通っても、警報が鳴動するように設定されているにも拘らず、四か所の神社の主要鳥居が、ほとんど同時にことごとくにひびがはいたり、破壊されているのが見つかった。それらの各神社にも、監視カメラが向けられていたにも拘らず、映像はその時だけシャッターアウトされていた。その時がどうも子の刻（ね）である。

その時、世界各国の心理学者、哲学者、数学者、天文学者、宇宙物理学者、生理医学者、心霊学者、占星術者などの他、ジャーナリストやメディア関係者が固唾を飲んで、見守る中、巨大なシステムは大実験に震えていた。何しろ人間による前代未聞の大実験が、いま始まろうとしていた。その理論の正しさ（ヒッグス粒子の存在の有無）を肉体で感じることに、がこの日の最大のイベントであった。そしてそれは遂にほぼ一〇〇パーセントという精度で確認された。それは無限大に及ぶ過去が、蓄積されて出来たものでもある。切り崩されたいくつかの過去の遺物はだが何処に消えたのか。そしてそれが各祭神の鳥居破壊の怪の時刻に重なったのだった。

京の神社関係者と警察は、一番初めに気付いた八坂神社の神主に、事情を訊くに全く要領を得ない。まるで神主が事件の首謀者であるかのようなあつかいに、彼は憤慨するのみ。

その内、似たような情報が城南宮、松尾大社そして上賀茂神社から次々と入って

来た。

当然、警察は監視カメラが切られていることから、同一の価値観を持つ人間の犯行、それも複数の計画的犯行と断定。しかし何のために。金目当てであるとする線は否定された。取り調べは、皆の注目を引くために仕掛けた、愉快犯の仕業か。最近はゲームに熱中するあまり、バーチャル世界と現実との繋がりがつかない、人間も再生産されている。(生産を通り越して再生産ですよ！)

この頃、普段から親しい二人の男、フリーライターの長野慎一と、カクレキリシタンの園田信夫、そしてこれはれっきとした、これで飯を食っている、占い師の先堂道子ら三人は集まることにより、三人寄れば文殊の知恵を、地で行くような神通力を得ると言う、興味ある関係にあり、その力はいま驚くべき結末を迎えようとしていた。

カクレキリシタンが例のブラックホールへの貢物である、十文字東宝刀のありかを突き止めた。それが壬生寺である。

三人は勇み立ち大宮の壬生寺へ向かった。当寺の入り口は名こそ分からぬが、深い緑の木に覆われ、脇には受付があつて、ちゃっかりひと儲けしようとする算段。だが、彼らは見物に来たのではなく、国家の一大事を背負ってきている以上、今は入場料など論外である。でもそれは通用しなかった。

「国家の一大事ですぞ」と言っても
「私どもは事前に何の話も聴いておりません」と言う。慎一にはこの一軒は一筋縄ではないかないな、と思え、

「新選組の真相がかかっています。これは学術的にも看過できない、重要な問題として」などとしつこく迫ると「新撰組の疑問とは……」とぶつぶつ言いながら、

「貴方がたは」と疑念一杯の顔をして睨んだ。

「決して、怪しい者ではありません。某テレビ局の者でして」名刺を渡しながら、カクレキリシタンが答えた。係は奥の方へ声をかけ、

「この者をご案内します」と言つて、ひとりのお武家さん風の老人に、目配せをした。三人はほっとして顔を見合わせた。

宝剣らしきものは奥の方で、埃を被っていた。この人はどうやら宝刀のことを知らないらしい。

「おっしやっているのは、このことかと思いますが」息を吹きかけ、埃を手で払いながら言う。

「何と、これは恐れ多くも三種の神器の宝剣ですぞ」慎一は顔を引きつらせながら言った。

「開けてみてくれませんか」係員は渋ったが、両手に白手袋をして、無造作に長さが五尺もありそうな、ズシリと重い木箱の帯を解いた。すると中には朱色の地に、金糸銀糸が施された、化粧袋がありその大きさと長さから推して、刀と思しきものが出て来た。

「さあ、いよいよだぞ」三人は顔を見合わせた。いずれもかなり緊張している。

「皆さん。さあ、開けますよ」慎一は生唾を飲み込みながら、その眩しい袋を縛った紐をほどいた。そして静かに引き抜く、そしてそこに三人がみたものは、沢山の宝玉と金銀をあしらい燦然と光り輝く、重々しい十文字束宝刀Ⅱ草薙剣であった。慎一は手袋を確かめると、鞘を抜きにかかった。だが剣は押ししても引いても、びくりともしない。さて三人は思案にくれた。だが、さすがカクレキリシタンは十文字の束の真ん中に、ルビーが一際鮮やかに輝いているのが、非常に不自然であると言った。

「これだ。間違いない」慎一は非常に緊張し、それに触れるのが、正直言って恐ろしかった。それで再三に亘って逡巡して、他の部分の可能性を調べたが、どうしても最初の判断が正しく思えた。

壬生寺の外は雨が降っているのか、鬱陶しい空気の内にも外にも、満ちてきて、どうやら本降りになりそうだ。風も出て来たのか、雨戸を雨風が叩く。雷も鳴りだし、時に、薄暗いお堂を真昼のように照らしだした。これは大荒れになりそうだ。「これは新選組の祟りかもしれないな」誰もがそう思った。

慎一はひときわものすごい光物がした時に合わせるように、十文字束のルビーを押した。途端に、慎一の手に電流を流したような、衝撃が走り、一瞬、虹色の光彩を放ったかと思いきや、十文字束が粉々に砕けて四方に飛び散った。三人と係員は何が起こったのか分からず、ド肝を抜かれて、その場にへたり込んだ。

「何だ？」四人は顔を見合わせた。激しい爆発と同時に一枚の紙切れが出て来た。ただでさえ破れかかって読みにくく、而も震えも加わっていたが、その文字を追うと、剣は長崎の……浜に眠る、やっと読み取れる字だけを追っていた、カクレキリ

シタンの園田が声を上げた。

「長崎に、古いキリシタン墳墓があるぞ」叫んだ。

「なに、本当か？」

「恐らく間違いはない。いやそれに違いない。考えてみてくれ。宝刀の飛び散った十文字、あれは間違いなく、伝えられていたキリストの象徴」

「それだけで断定するのはどうも」慎一は慎重にならざるを得ない。尚も紙を調べていると、ぼんやりと絵が浮き出した。

「マリア観音様だ」カクレキリシタンは跪き、十次を切った。この時、彼は幻聴かもしれないが、囁きのような声がしたような気がした。何処からか『ひつぎの穴』という言葉が飛び出したのだ。

『古の謎』が解明できる。

時は徳川時代の幕開けの頃、長崎県のこの地で、キリスト者を巻き込んだ、大規模一揆である島原の乱が起きた。その激しさに徳川幕府は大いに驚き、厳しいキリスト教弾圧に乗り出した。そんな幕府方の取り締まりを無事逃亡したキリシタンはカクレキリシタンとして、長崎県の平戸や生月島に逃れ、キリスト像やマリア観音などを納戸に隠し、密かに信仰を続けたのだった。その中の一派に今は自らカクレキリシタンを、自称する者のひとりにこの園田信夫の祖先がいた。その熱心な信仰者である園田信夫の祖先である園田治平兵衛に、伝道師は一つの言葉を捧げた。それこそ『ひつぎの穴』ただひとつのことだった。それはオラシヨ（祈祷文）の中に折りこまれて、忘れようにも忘れられない、貴重な言葉として彼の頭に刷り込まれた。

三人は今こそ登り詰めつつあった。北十字星の midpoint と四神相応の中心。中心と中心を結べば、神が介在して両者を融合させることが出来た。

長崎県K町の浜はいま夏真っ盛り。砂浜を砂漠のような、熱風が吹き渡る。微かに潮の匂いと漁具の匂いが、園田を夢中にさせた。「一瞬よ止まれ。俺の浜だ。あまりにも美しい、素晴らしいこの一瞬を、独り占めできる」園田は叫んでいた。

目指す遺構は防砂林の片隅に眠っていた。それはK町の役場が管理するのか、ハイビスカスやブーゲンビリアなど南国の花で飾られていて、保存状態もいい。粗末

な建物であったが、周囲は何か敬虔な匂いが立ち込め、思わず手を合わす三人であった。

懇ろにお祓いをし、園田はその『ひつぎの穴』を探した。するとかまぼこ型の遺構の右側前方のクルスの中央に、貯金箱にあるような幅一三センチ程の細い穴が見つかった。「これだ！」三人は叫んだ。

「どうか、間違いではありませんように……」祈りを込め、その穴に持って来た束の吹き飛んだ宝剣を先の方から差し込んだ。すると、ボンと留め金が外れるような鈍い音がして、自然に棺の蓋が開いた。

恐る恐る中を覗いた三人がみたものは、それは鈍色した三〇センチ程の、マリア観音であった。抱え上げてみると、ズシリと重い。じっと見つめている三人は「中身は何か、X線で解析してもらおう。或いは思わぬ結果がでそうだ」

ことし開港から四五〇年を迎えるK町の港はよく整備され、南国ムード漂う景色は、これ程よく南蛮文化を受け入れ、発展してくれたものだど、思われるような喜びと同時に、この歴史を封印してはならない、と強く心に誓う園田であった。

この美しい港に面した役場と相談し、散々協議した結果、関係者はマリア観音を一度ジャクサZに預かってもらうことに、話は落ち着いた。

三人は役場の近くの料理屋で、園田にとっては初体験の長崎名物の皿うどんを、そして先堂は本場では初めての、長野にとっては久しぶりのちゃんぽんに舌鼓をうった。

正午のNHKニュースは、これまで京都の夏の怪であった、四神社の主鳥居がいつの間にか綺麗さっぱりと、蘇ったことを告げていた。そして監視カメラが、正常に作動していたにも拘らず、子の刻そこには鼠一匹写ってはいなかった。つまり誰も手を着けていないのに一片のかけらも残さず、それは修復されていた。一連のそうした現象を『夏の夜の怪』として、人々は不安な気持ちで受け止めていた。その原因を突き止めるべく、管理会社は原因の究明に追われることになった、と言う。

翌日三人は美しい松林と、白く輝く銀河のような砂浜を、足を焼きながら、波打ち際まで走り、キラキラと輝く水の美しさに心うきうき、いつとき子供のようになると戯れた。

大阪への帰還は、夏の星月夜を仰ぎつつも「猫に小判。花より団子か」と、ビールの缶をカクレキリシタンに渡しながら、三人は哄笑した。

あれから半年も過ぎたころか、ジャクサ乙は鉛のマリア観音から出た物質は、或いは暗黒物質であったかもしれない、と報じた。

内容物が非常に特殊であったため、精度の高い分析にも拘らず、捉えることが出来なかった、と発表した。

慎一はベランダで、さんざめく星々を愛おしいものでも観るように眺めた。明日はきつと来る。新しく生まれ変わって……。命とは生成の繰り返しだ。